

民間伝承の地域的特性に関する歴史地理学的研究

－交野ヶ原における天体伝承を事例に

中村 好恵

(佐々木高弘ゼミ)

第1章 歴史地理学からみた民間伝承

歴史地理学とはある特定の過去の地域について研究する学問である。歴史地理学には時代的に①先史歴史地理学、②原史歴史地理学、③狭義の歴史地理学（記述された歴史）に分けられ、資料的に①文献歴史地理学、②考古歴史地理学、③民俗歴史地理学に分けられる⁽¹⁾。またイギリス人地理学者のH.Princeは研究領域を①real world、②imagined world、③abstract worldの3つの世界に分けている⁽²⁾。従来、日本においては①に偏っており、②や③の研究は進んでいない。さらに資料として③に分類された民俗歴史地理学は地名研究を除いて、あまり行われてこなかった。佐々木高弘はこの民俗歴史地理学のテーマになりえる民間説話を、それらが語られる地域やその環境との関係から研究している⁽³⁾。

さて、本論では人文地理学の5つのテーマ（文化圏・文化拡散・文化生態学・文化的相互作用・文化景観⁽⁴⁾）のうち文化生態学に焦点を当てていく。文化生態学とは文化と環境の相互作用についての研究である。つまりは文化への環境の影響と生態系に与える文化を通じて行われる人間の影響のあり方を追求するものである。特にその内、イーファー・トゥアン（Yi-Fu Tuan）が1960年代に欧米で心理学、文化人類学の影響を受けて盛んになったと指摘する環境知覚研究を取り上げる⁽⁵⁾。環境知覚研究は自然に対する人々の知覚に焦点を当てるもので、それぞれの文化集団は自然環境に対するメンタルイメージを持っていると考える。歴史地理学における環境知覚研究は、過去の人々がどのように環境を知覚し、どのような地理学的行動を行っていたのかを研究するものである。つまり、過去の人間集団と環境の関係をその時代の人々の

価値観で見るのである。

過去の人間集団と環境の関係を、その時代の人々の価値観から知るための資料として民間伝承があげられる。民間伝承とは「主に人々の日常生活を構成する文化だという意見では生活文化に近く、また、文化を上下の二層に分けた場合には基層文化の基本的な要素といえる⁽⁶⁾」と『日本民俗大辞典』にある。また、歴史地理学の立場から民話を研究した佐々木高弘は民間伝承とは、「個人の口から直に聞くことができるし、それを数多く集めれば、ある程度の地域の人たちの共通性を見いだすことも可能で、またある程度の時代的厚みもある⁽⁷⁾」としている。さらに佐々木は民間伝承自体は変容していくが、「場所は、様々な言葉で表現されるのだが、地図上で見れば、不変⁽⁸⁾」だと指摘し、伝承と場所との密接な関係を見ている。つまりは、民間伝承に出てくる場所はその伝承を発生させた人々の「場所のセンス（sense of place）」が係わってくるのである。「場所のセンス」とは「ある場所に住む人たちが、その地域の環境と密接に関わる中で、長いつきあいの間に生み出した、自分たちと環境や場所との、独自の関係を構築するセンスである⁽⁹⁾」。そのため、佐々木は「口頭伝承が、失われた、土地と人々の結びつきを、語っていたのだと⁽¹⁰⁾」指摘している。このような観点から民間伝承を調べることにより、その地域の集団性や時代性といった内的世界観を知ることができるのである。

そこで本論では大阪府交野市と枚方市の民間伝承に焦点を当てることによって、この地域に住む人々の内的世界観を探ることにしたい。

第2章 交野ヶ原の民間伝承

第1項 交野ヶ原の位置

「交野ヶ原」・「交野」とは交野台地の旧称で、現在の行政区分において大阪府枚方市と交野市にあたる(図1)。この地域は京都府、奈良県の県境に位置する。古代よりこの辺りは河内国の北部に位置し交野郡と呼ばれていた。交野郡は南部から北東に延びる生駒山脈の北端に位置する。この



図1 交野市と枚方市の位置図

山の尾根にそって古代の山城国と大和国の国境がはしっている。東の端には石清水八幡宮が鎮座する男山丘陵があり、東側は洞が峠で区切られ、北側は淀川で区切られている。淀川で区切られた北部は摂津国との国境にあたっている。また西側も香里丘陵から枚方丘陵へと広がっており、生駒山脈との間にある寝屋谷には東高野街道が通り河内平野へと続く。このように交野は複数の国境地帯にあり、交通の要所とされてきた。そのため、交野郡の最も古い記述は『続日本紀』の樟葉駅に関するものである⁽¹¹⁾。交野郡は西部の茨田郡に含まれており、8世紀ごろに分割されたとされている⁽¹²⁾。交野台地は標高20~30メートルの平坦地である。地質は砂礫が多く、そのため水不足であったため原野が広がっていた。しかし台地の中心に天野川・穂谷川・船橋川が淀川に向けて南東から流れているものの、これらの川は度々氾濫し洪水

被害も起きていた。広大な原野で大きな川が流れていたこともあり、多くの野鳥が集っていた。そのため、平安時代になると貴族たちの間で、この地での遊獵が伝統となる。生駒山系の奈良県との県境を流れる天野川は、元々砂川で色が白く綺麗であった。『伊勢物語』にもあるように「狩りくらし七夕つめに宿からんあまのかはらにわれはきにけり」などと、狩にきた貴族が、多くの歌を創り詠うようになる⁽¹³⁾。本論文では、この枚方市と交野市を合わせた、交野台地と枚方台地の一部を含めた地域を総称して交野ヶ原と呼ぶ。

第2項 交野ヶ原の伝承

では、交野ヶ原に残っている伝承をいくつか紹介しよう。奈良との県境に物部氏の始祖饒速日尊(ニギハヤヒノミコト)を祀った磐船神社がある(写真1)。この神社の近くに峠が峰があり、この峰には饒速日尊の天孫降臨神話が伝えられている。物部氏の伝承を盛り込んだ『先代旧事本記』の第3巻「天孫本紀」に以下のような神話が残っている。



写真1 磐船神社

伝承① 天祖、天璽端宝十種を以て、饒速日尊に授く、即ちこの尊、天祖御祖の詔をうけ、天の磐船に乗って、天降り、河内の国の河上の峠が峰に座す⁽¹⁴⁾。

この磐船神社がある谷を流れる川を天野川と呼ぶ。この天野川にまつまわる天女の伝承が曾称好忠の家集『曾丹集』にあり、『河内名所図会』に次のように紹介されている。

伝承② むかし仙女あり。この溪水に浴して道

遙し、その羽衣を少年に匿さる。女困りて留まり、少年と夫婦となり、年をへて天に還る故に天の川と号す⁽¹⁵⁾。

この天野川流域には羽衣橋や逢合橋、鵲橋などの天人女房にまつまる橋が存在している。さらに天野川流域には、枚方市茄子作にある中山観音寺跡の岩石を「牽牛石（牛石）」と俗称し、交野市星田にある星田妙見宮（小松神社）のご神体は「織女石（妙見石）」（写真2）と呼ばれている。貞観17（875）年頃に書かれたこの神社の『妙見山影向石略縁起』には八丁三所という星降り伝承が残っている。



星田妙見宮の織女石

伝承③ 嵯峨天皇弘仁年間（810～824）に弘法大師が獅子窟寺の山中の吉祥院にある獅子の岩屋に入って修行をしているとき七曜星が三カ所に降ってきた。それが星田妙見宮と光林寺境内、もう一つが高岡山の南の星の森である。この石は影向石とされ、その位置関係はほぼ正三角形でそれぞれの距離が八丁あるとされていることから八丁石、八丁三所と呼ばれている⁽¹⁶⁾。

さて、この星田妙見宮と天野川を隔てた先には交野市倉治の織機神社がある。この社は渡来人の交野忌寸が祖漢人庄員を祀った神社で、その後の神道家により「天棚機比売大神」「栲機千々比売大神」をご神体としている。この天棚機比売大神とは七夕伝承にちなむ織姫の神名である。

天野川周辺に戻って、天野川と淀川の合流地点から西側は現在、京阪電車枚方市駅になっている。駅から南東の辺りは古来、交野郡でなく、茨田郡

の岡村であった。現在は閑静な住宅街で岡南町、岡山手町などと呼ばれるこの辺りは小高い丘であった。この丘は別子山と呼ばれ鶴女房伝承にまつわる話が残っている。

伝承④ 一乗寺所蔵の「天ノ川鈴見地藏尊縁起」によると推古天皇の時、別子山の麓に鈴見という男が住んでいた。年老いた母のため孝行をしていたが貧しく、交野の里へ出稼ぎに出なければならなかった。ある日、出稼ぎの帰りに川原で数人の男が傷ついた一羽の鶴を殺そうとしていた。鈴見は鶴をかわいそうに思い助けてやった。それから十日ばかり過ぎて一人の女がどこからともなく訪ねてきて母の看病をしてくれた。だが、母は死に、霊夢のお告げによって女と夫婦となり、一人の男の子をもうけた。子どもが5歳になったとき夫の留守中に女は子どもを連れて別子山に登り、母はもと天上界に住む天女であるが、鶴と化して飛んでいる時、運悪く弓に当たって殺されようとしている時、父に助けられ、夫婦となってお前を生んだのだと云って鶴の姿に戻り、飛んでいった。その後、この丘を別子山または鈴見ヶ岡と呼ぶようになった⁽¹⁷⁾。

このように交野ヶ原には伝承やそれらにまつわる寺社や記念物が存在している。これらの伝承などに見られる共通点は、天体（星）に関する内容だと言える。この地域で見られる天体（星）に関する伝承は宗教と大きく結びついていると考えられる。しかしこの地域的特性は、日本全体としてみれば極めて稀な事例なのである。

第3項 日本における天体への興味

古来より日本における天体に関する興味は薄いと言われてきた⁽¹⁸⁾。篠田知和基はミルチャ・エリアーデの見解として、どの国にも天体への関心と神への概念があるとしているが、これはキリスト教的な考えであり、日本では当てはまらないとしている。日本神話の「天」という概念は「天界」を指すのではなく、「海」とも同義語とされた。「天皇」の「天」も中国から入ってきた地上の象徴を示す「天」を用いたものだとされている。また、「日本の神はものによりついて現れるので、

空では現れようがなかった⁽¹⁹⁾」ともしている。古代信仰などの研究で知られる吉野裕子は、元来日本にあった天照大神は思想的に対立する仏教が入ってくることによって大日如来と習合し表立ったが、陰陽五行思想（道教）の場合は漢字の移入とともに自然と日本社会に入ったため目立つことがなかった、と指摘する。そのため陰陽五行思想が信仰する星の伝承が見えなくなってしまった。だから北辰信仰は土着の神道と密接に結合したにもかかわらず、隠された神々として表面化しなかったのだと主張している⁽²⁰⁾。

しかし、野尻抱影や内田武志、北尾浩一などの民俗学的研究から日本全国に多数の星の方言や伝承の存在が明らかにされてきた⁽²¹⁾。さらに勝俣隆は『星座で読み解く日本神話』の中でサルタノヒコやアメノウズメなどを星に置き換えている。また、オリオン三つ星は『記紀』に登場する住吉三神に相当するのではないかとし、昴星は天孫降臨神話の天地を結ぶ通路の天の八衢に相当するのだと述べている⁽²²⁾。つまり『記紀』神話は、たくさんの天体伝承を含んだ星辰神話なのではないかと勝俣は指摘しているのだ。

一般的に古代日本では天体に無関心とされてきたが、上記のような主張によれば伝承として人々の深層の中に天体に関する興味があったと考えられる。

さて、次に交野ヶ原の古代における開発過程に天体伝承がどのように関わってきたのかを具体的に見ていきたい。ただし、本論では天体、星を広義に天界と置き換えて考えたい。

第4項 交野ヶ原の開発

『交野市史』によると、交野ヶ原は市の中心を流れる天野川から、鳥見一族（肩野物部氏）によって弥生時代に農耕地として開拓されたのではないかと、としている⁽²³⁾。この物部氏は遠祖を饒速日尊（ニギハヤヒノミコト）とする。『記紀』の中で饒速日尊が天つ瑞を所持し、神武天皇以前に大和に土着していた「天神」の子であるとされ、先の伝承①がその様子を記している。

伝承①に描かれている砦が峰⁽²⁴⁾は私市の南に位置し、さらに磐船街道を奈良に向かうと磐船神社がある（図2）。そこには饒速日尊が天孫降臨し



図2 峰ヶ砦と磐船神社の位置図
(注12「交野市史」p450より)

たと言われる巨石が祀られている。

『先代旧事本記』に描かれている饒速日尊の五代後の伊香色謎命は開化天皇の皇后になり、崇神天皇を産むことになる。弟の伊香色雄命の所領は河内であった。その子供の多弁宿禰は「神代系図巻乃下 物部連系図」によると交野連の祖だと記されている。そして彼らが天野川を下り稲作文化を広めた。彼らが農耕の神として創建したのが京阪河内森駅近くの天田宮である。近くを流れる天野川はおいしい甘い米が取れることから甘野川と呼ばれ、その一帯を甘田と呼んでいた。その甘田の田の神としてこの神社は甘田宮から天田宮と呼ばれることになる。この天田宮は天野川を中心とする条里制の一条にあたり⁽²⁵⁾、基準軸として認識されている。

これらの物部氏が天野川を中心とした「農耕開発を盛んにしたのは、3世紀（201年－300年）の終わりから4世紀（301年－400年）の初頭、すなわち開化・崇神朝、あるいはおそくとも垂仁朝の時期で時の大臣伊香色雄命がまずその開発に着目し、その後その子多弁宿禰とその子孫肩野物部氏の一族が、いわゆるあま田とその下流一帯の経営

をした⁽²⁶⁾」とされる。

近年の考古学の発掘成果によると、物部氏が開発を行ったとされる3世紀頃の交野ヶ原には、弥生後期から古墳時代初期の方形墓が見つまっている。さらに古墳時代前期になると天野川流域の森古墳群、鍋塚古墳などの前方後円形が出現する。この二つの古墳には畿内・東海や北九州では首長のネットワークのシンボルとしての舶載神獸鏡が存在している。中・南河内では前方後円形や舶載神獸鏡がないことから、淀川流域の摂津と北河内が政治的に大和盆地の政権と関わっていたことの表れではないかとされる⁽²⁷⁾。また、天野川流域で一番古い前方後円墳の禁野車塚古墳は100mを超える大きさで、2008年の調査で奈良の箸墓古墳と相似の型のため3世紀半ばに築造されたと考えられる。加えて、4世紀の古墳が数多く存在していることから、「天野川流域に、3世紀代からこの地に大古墳を築く勢力があったこと、それらはヤマトの初期王権と深い関係を有していたこと⁽²⁸⁾」

表1 交野ヶ原の古墳時代前期の古墳と遺跡

番号	名称	所在地	形状	年代	特徴
1	森古墳群	交野市森	前方後円形	3世紀後半	鏡・埴輪
2	鍋塚古墳	交野市鍋塚	前方後円形	3世紀後半	鏡・埴輪
3	禁野車塚古墳	交野市禁野	前方後円形	3世紀後半	鏡・埴輪
4

表2 交野ヶ原の古墳時代中・後期の遺跡分布

番号	名称	所在地	形状	年代	特徴
1
2
3

が指摘されている(表1・2, 図3・4)。

古墳群が密集する場所には交野忌寸など渡来人の痕跡が残っている。たとえば、交野市倉治の古墳群や津田・藤阪の古墳群などは渡来人の交野忌寸が住んだ土地で、彼らは大陸の織物文化をこの地に伝えた。倉治の元の集落は織物の植物を山から手に入れるため山麓にもっと近かったとされる。白鳳

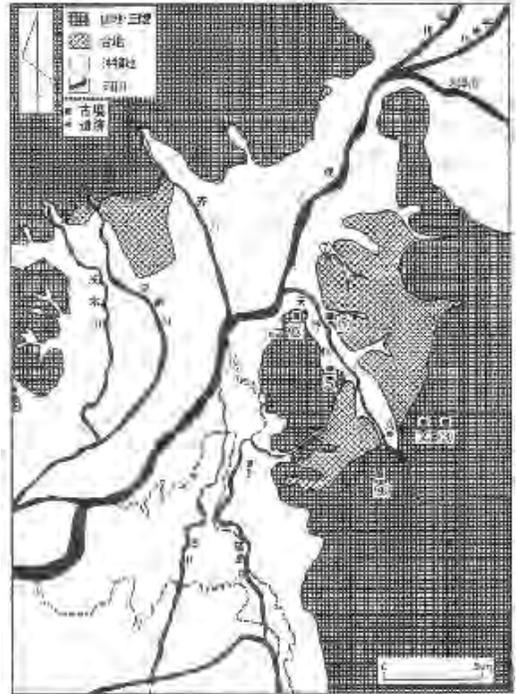


図3 交野ヶ原の古墳時代前期の古墳と遺跡
(数字とアルファベットは表1, 2に対応)
(注28 上遠野論文, 5頁より)

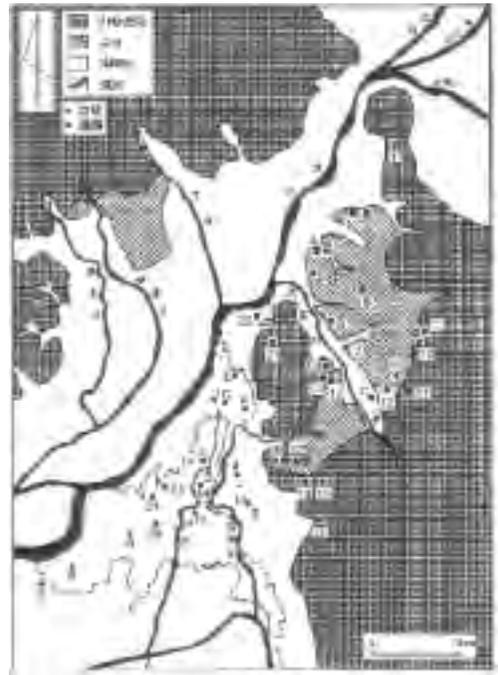


図4 交野ヶ原の古墳時代中・後期の遺跡分布
(数字とアルファベットは表1, 2に対応)
(注28 上遠野論文, 5頁より)

元年（672）に壬申の乱が起きたときにこの一族は大海人皇子に味方し、乱後交野忌寸の姓を与えられた。倉治の機物神社は交野忌寸の祖漢人庄員を祀った神社で「天櫛機比売大神」,「栲機千々比売大神」を祀っている。この神社の社殿は南を向いているが、西側に大きな鳥居があり、この鳥居から交野山がよく見え、交野山を御神体とする神社であったのではないかとされている。また、神社から交野山のほうへ東南に向けて線を引くと糸吉神社がある。今はお稲荷さんが祀られている小さなお宮で由来も分からないのだが、元は機織神社の祖形ではないかとされている⁽²⁹⁾。交野忌寸は機織の技術などでさらに栄え、交野山山頂付近に織物神社の守護寺として開元寺を天平3年（731）頃建立した（図5）。



また、枚方市中宮のある山田郷には山田宿禰、山田連など漢系の人々がいた。特に山田連銀は法律学者として有名で、養老律令の編纂者であった。彼は『続日本紀』には百濟人成と記るされ、律令の編纂後山田連の姓を賜ったのだとされている⁽³⁰⁾。彼らが本拠地としていたところには百濟王氏という渡来人も存在していた。百濟王氏は齊明天皇6（660）年に新羅と唐の連合によって滅ぼされた百濟国の亡命王族である。百濟王子豊璋の弟、禪広（善光）は祖国が滅亡し、帰国を諦め日本の朝廷に仕えていた。そして持統天皇の時代に朝廷から「百濟王」の姓を賜った。禪広は大阪市生野区桃谷の猪飼野や猪甘津と呼ばれる古代の港辺りに住んでいた。この桃谷はかつて百濟郡と呼ばれ、『日本書紀』には天智3（664）年に百濟の人が住

み着いたとの記述がある。その後彼らは、天平勝宝2（750）年に交野に移動した。これは禪広の曾孫の敬福が官位七位階に昇進し、河内守となったからだとされているが、もともと百濟郡は雨の多い地域であり、この年に茨田堤が崩壊したことから渡来人の技術で水害をどうにかするために交野に移ったとも考えられる。また、前述の山田連が百濟の人だということも関係しているようである⁽³¹⁾。敬福は地形的にも京都と大阪の中心で淀川もよく見渡せる枚方台地の北西部の中宮に邸宅をかまえた。奈良時代に創建された百濟寺跡と同時期に、南側に創建された百濟神社が今も残っている。百濟神社の社殿によれば、敬福が兄の南典の霊を慰めるために祀廟と寺を建てたという。この百濟王氏は後に述べる桓武天皇とも深い関係がある。

このように交野ヶ原には渡来系の人たちの足跡が残されている。これら渡来系の人々は機織りや土木技術だけでなく、仏教や道教といった信仰を民間レベルで持ち込んでいる。そこで次に、信仰に関する民間伝承に注目していきたい。

第5項 民間伝承にみる仏教と道教

第3項でも述べたように古代日本において天体への関心は薄かった。しかし、古代国家にとって暦の作成は権力と結びつく重要な要素であったことから、必ずしも天体への関心がなかったとは言えないはずである。日本に天体の信仰が大きく流入してくるのは、継体天皇の時代からであるとされている⁽³²⁾。また5世紀初期頃から大王の古墳建設工事で日程を知る必要があり、暦を普段から使うようになっていったとする説もある⁽³³⁾。5世紀後半の暦は、中国南朝と百濟の友好関係によって宋から導入されたものを利用していった。そして、継体天皇7（513）年に百濟から五經の一つ易経が導入された。とくに推古天皇10（602）年に百濟の僧の観勒が暦法、天文、地理書などを朝廷に献上した⁽³⁴⁾。推古天皇の時代は百濟から大量の人がやってきて、百濟の暦博士が派遣され、彼らが日本の暦を作っていたとされる。観勒が日本に来朝した頃、聖徳太子が推古天皇の摂政となり、冠位十二階など陰陽道の影響を受けた政策が次々とられる⁽³⁵⁾。また、『記紀』に讖緯説（政治的予言

説)の影響が現れるのは推古天皇からであり、同時に天変災異の記事も書かれている。このことは天変災異が政治的意味を持ったことを示している。以後『記紀』には、陰陽道をはじめ天体に関する記述が増えていく。

さて、推古天皇と交野ヶ原の関係を上げておくと物部氏が開発した「私部」がある。この土地は敏達天皇が皇后に豊御食炊屋姫を迎えた時、良い稲の取れる皇后領として姫に与えた。「私(きさい)」は皇后のことで、「部(べ)」はその民のことを表している。この豊御食炊屋姫は後の推古天皇で、したがってこの「私部」は後に天皇領となり交野三宅と呼ばれるようになる⁽³⁶⁾。次に推古天皇時代の伝承④について述べていきたい。この伝承に出てくる別子山には一乗寺という寺がある。社伝によると最澄の開創で京都市内の洛北にある一乗寺をこの地に移動させ、平安京の裏鬼門にあたるため、阿弥陀如来と日吉神を安置して鎮護国家の社寺としたとされる。

またこの鶴女房の話は天人女房譚と繋がる⁽³⁷⁾。先に上げた天野川の伝承②は天人女房譚で、この天人女房の伝承は滋賀県余呉湖では伊加連の始祖神話となる。交野ヶ原の鶴女房譚がある岡村の隣は、伊香色男や伊香色女の邸宅があったとされる伊加賀の人々の集落である。伊香色雄命の子供の多弁宿禰は、肩野物部氏として天野川を中心にこの地を開発してきた一族であり、このことから枚方市にある鶴女房は、伊加賀に住んでいた人々の影響もあるのだろう。

この伝承④がさらに興味深いのは、鈴見の親孝行を聖徳太子に嘉せられて六万体の随一なる地藏尊を授けられ、鈴見父子は百年長生きの往生を成し遂げたと伝えられている⁽³⁸⁾点である。聖徳太子はこの場所以外にも交野ヶ原で足跡を残している⁽³⁹⁾。この伝承④の鶴は天上界の天人で、日本に仏教が伝来し人々が善行を行い安養国であると聞きやってきたのだと語られている⁽⁴⁰⁾。このような伝承は、宗教者が信仰を広めるために作ったものである。それが仏教の場合、弘法大師や親鸞の伝承へと繋がっていく。その経緯がこの伝承④にも含まれていることがわかる。また、伝承③も同じく元は道教的な天体伝承であったものが、仏教によって書き換えられたものだと考えられる。

伝承④で鈴見が住んでいた辺りは字南浦とされ、旧の枚方市役所前辺りにかつて古松があり、それを鈴見が松と呼んでいた(図6)。一般的に松は不変や長寿の象徴とみなされ、神が降りてくるところと認識されてきた。つまりは、神がいる天上と地上を結ぶ世界樹の役割をはたしているのである⁽⁴¹⁾。また、松は道教の神仙思想とも繋がっている⁽⁴²⁾。



図6 別子山付近(新古今御所跡)の地形図(二万分の一縮尺)『枚方』

その他にもこの世界樹あるいは仏教にかかわる伝承が見られる。伝承⑤は茨田郡だが、交野郡伊加賀村に近く興味深い伝承なので紹介する。

伝承⑤ 文明7(1476)年蓮如上人が河内国茨田郡中振郷山本の内出口村中之番に来て石見入道空念坊住の居宅に身を寄せ、付近の善男善女を集めて説法したる時に、毎晩熱心に聴聞する美女があった。或夜説法の後唯一人居残って上人に申す様、妾はこの付近の方二町許の深淵に住む大蛇なるが、上人の有難き説法によって功德を得、間もなく昇天することになったから、深淵を上人に献上せん、願くば此の池を埋めて境地となし、御堂を建立されたしと申し述べて姿を消し、やがて池の側の皂莢樹(サイカチ)から天上した。依って付近の人々の合力により東方の小山を引きくづしてこの池を埋めて光善寺を建立した⁽⁴³⁾。

図7は『河内名所図会』に描かれた光善寺で、中央の池の真ん中にある島にサイカチの木が見える。また、女性が蛇に転生するモチーフは仏教に



図7 「河内名所図会」 光善寺図
(巻15 452-453頁より)

由来する。しかも、この蛇が天に昇るのである。また、道教と仏教の関係を示す伝承がある。道教に関わる話を伝承⑥にあげる。さらに、同じ地区で仏教に関わる伝承を⑦、⑧としてあげる。

伝承⑥ 大字村野字藤田に在って、約一畝許の小丘をなし、今に觸ればたたると云うので雑草のまま放置されている。保井芳太郎所蔵古道図に「阿部清明林、夏此所かもすまず」とあり、昔安倍晴明がこの地に於いて修業し、蚊を封じ込めて置いていたので、今に至るも此のところだけ蚊が居ないと言われている⁽⁴⁴⁾。

伝承⑦ 昔弘法大師がこの里に来たり一夜の宿を乞うた時、かかる高僧とも知らずして、何処の家にも泊めなかったので、大師は止もなくこの場で野宿した。以来ここには蚊が居ないのだという⁽⁴⁵⁾。

伝承⑧ 当地は昔、藤田千軒と称し、千戸の村で栄えていたが、弘法大師が宿を求めた折、村人は誰も乞食姿の大師に宿を貸すものがなかった。大師は、今に五軒になると言って去った。その後、藤田は衰微して数軒を残すだけとなった⁽⁴⁶⁾。

この話にでてくる藤田は枚方市の天野川と藤田川の間位置する集落である。この集落は、交野市の倉治や枚方市の津田のように陰陽師の集落として栄えていた。そこに、仏教界を代表する弘法大師が訪ねる話が残っている。伝承は宗教者が信

仰を広めるために作ったものであるとすれば、この伝承⑦、⑧はそれまでその土地で信仰されていた宗教を「悪」として元々その土地にあった伝承の上に話を塗り替えていったのであると言えるだろう。そのような視点から伝承を見るのであれば、この地域で弘法大師を邪険に扱い、その結果村が衰退するのは、道教と仏教との対立を表しているのではないだろうか。

この章では一通り交野ヶ原の伝承とそれに関わる人々と宗教などを見てきた。次の章からはさらに発展して交野ヶ原と関わりの深い桓武天皇と天の祭祀について述べていきたい。

第3章 桓武天皇と交野ヶ原

第1項 秦氏と交野ヶ原

桓武天皇について述べる前に前章でも少し触れた聖徳太子について触れておきたい。聖徳太子は日本に暦や道教的な思想が入ってきたときに推古天皇の摂政となり、それらの思想の影響をうけた政策をとっていったと前に述べた。この聖徳太子が新しく入ってきた思想をより理解し、また活用するための指導的人物として秦河勝を側近においたとされる。二人の関係が明らかになっているのは崇仏論争の中で、河勝が聖徳太子の側近として重要な役目を果たしている。特に二人の関係が明白なのが『日本書紀』の推古天皇11年(603)11月条で、

11月の己亥の朔に、皇太子は大夫たちに、「私は尊い仏像をもっている。だれかこの像を得て礼拝しようとする者はないか」と言われた。すると秦造河勝が進み出て、「わたしが礼拝いたしますしょう」と言い、さっそく仏像を受けて蜂岡寺(広隆寺)を造った⁽⁴⁷⁾。

とあり、聖徳太子の命を受け、河勝が太秦の地に蜂岡寺(広隆寺)を創建したことが伝えられている。太秦の地に創建したのはこの土地が河勝の秦一族の場所であったからである。また、「蜂岡」は「八岡」とも置きかえられ、重要な意味をもっている⁽⁴⁸⁾。推古11年(603)とは冠位十二階が定められた年で聖徳太子の政権が全盛期であった。この時期に仏像の下賜と寺の創建があったのは聖

徳太子の政策の一つであったととらえる事ができ、その重要な役目を河勝が担っていたのである。

さて、秦河勝の生誕についてはおもしろい伝承が残っている。後世に創られた世阿弥元清の能楽『風姿花伝』の「第四神儀」において、

日本国に於いては、欽明天皇御宇に、大和国泊瀬の河に洪水の折節、河上より、一の壺流れ下る。三輪の鳥居の杉のほとりにて、雲客壺を取る。なかにみどり子あり。かたち柔和にして、玉の如し。是降人なるが故に、内裏に奏聞す。其夜、御門の御夢にみどり子の云、我はこれ、大国秦始皇帝の再誕なり⁽⁴⁹⁾。

という伝承がある⁽⁵⁰⁾。この中で、河勝は「みどり子」と記されている。「みどり子」とは「嬰兒」とも書き、生まれたての赤子のことをさす。交野山の隣、寺の集落には嬰兒山がある。この山には乳母谷や溺石などがある。嬰兒山は別名龍王山とも呼ばれ、山頂には龍王祠があり、この祠は雨乞いに使われたとされている。後で詳しく述べるが、この龍王山は長岡京の中軸線を南に延長させた場所であり、長岡京の都市プランニングにとって重要な山であった可能性がある。そしてその中軸線を北に伸ばした場所が秦氏の拠点である太秦である点も注目すべきであろう。

それでは交野ヶ原に関係が深い桓武天皇についてみてみよう。

第2項 桓武天皇

桓武天皇は天智天皇の孫の白壁王（光仁天皇）と新笠女の子供、山部王として誕生する。母親の新笠女は百済婦化人で平城京の下級官人の和史乙継と土師宿禰真妹の娘として生まれる。この真妹は京都の桂にある大枝に住む土師氏の出である。そのため、桓武天皇は母親の出身地である乙訓郡の大枝辺りで育ったのではないかとされている⁽⁵¹⁾。この土師氏は仁徳天皇陵のある百舌鳥野に拠点を置いた血筋であった。仁徳天皇は最初に鷹狩を行った人物で、場所は百舌鳥野であった。鷹狩は百済から伝わったとされ、この仁徳天皇に鷹狩を教えたのがこの土師氏であった。そのため桓武天皇は鷹狩が得意であったとされる。つまりは、鷹狩の

伝来が百済からであり、鷹野として朝廷指定地となる交野ヶ原には百済王氏が住んでいたのである。ここにも桓武天皇と百済、交野の繋がりが見えてくる。ただ、桓武天皇が幼い頃はまだ鷹狩が禁じられていた。それが解禁されてから桓武天皇は頻りに交野において鷹狩をしている（資料1を参照）。交野ヶ原には渡来系である母方の一族が暮らしていた。百済王氏の邸にも桓武天皇はたびたび訪れていたであろう。桓武天皇と百済王との繋がりを示す資料として『続日本紀』の延暦9年2月27日に「百済王らは朕の外戚である⁽⁵²⁾」と自ら述べている。桓武天皇は百済王武鏡の娘教仁を夫人として迎え、大田親王が生まれている。また桓武天皇は、訪問していた百済王邸で明信という女性と出会ったとされる。この女性との関係は定かではないが、若いころの桓武天皇とは深い関係があったと推測されている。そのため、明信は藤原南家の継縄に嫁に行ったが、右大臣継縄の妻としての地位と桓武との旧愛を背景に、尚侍として後宮を取り仕切っていた。

桓武天皇と関わりの強い人物として藤原北家の種継をあげる事が出来る。彼は桓武天皇と同じ年生まれで、母親は秦氏の人であった。彼は桓武天皇が育った乙訓郡の隣の、秦氏の本拠地葛野郡辺りで育ったとされる⁽⁵³⁾。桓武天皇が山部王の頃、天平神護2（766）年に従五位上となった時、同時に種継も従六位上から従五位下と三階も飛び越して叙せられる。そこから種継は、山部王が皇太子となるに従ってより栄進していく。そして種継は山背守に任ぜられる。この頃から桓武天皇と種継との関係は親密だったものと思われる。それは桓武政権が藤原式家と深く関わり合っていたとされているからである。このことが、長岡京遷都へと繋がっていくことになる。

さて、桓武天皇と重要人物についてまとめたが、桓武天皇が交野ヶ原で執り行った祭祀について次の項目で述べていきたい。

第3項 桓武天皇と天神祭

桓武天皇は日本で初めて郊天祭祀を交野ヶ原で行っている。もともと、この郊祀とは古代中国において都の郊外で行われた祭祀で、円丘を築き冬至の日に「天の神」を祀るものであった⁽⁵⁴⁾。日本

での初見では『日本書紀』の神武天皇四年二月の記事で、天神と皇祖を祀ったとある。しかし、中国の郊祀をそのまま採用したのは桓武天皇が最初である。また史上、この祭祀を行ったのは桓武天皇と曾孫の文徳天皇だけである。『続日本紀』によると延暦4年11月10日に「天の神を交野の柏原に祀った⁽⁵⁵⁾」との記述がある。交野での祭祀はいずれも11月に行われていることから冬至の祀とされている。本来、中国では王朝の始祖、例えば、秦であれば始皇帝を祀るが、桓武天皇は神武天皇を祀らず父の光仁天皇を祀った⁽⁵⁶⁾。つまり自分たち親子がこれから始まる王朝の始祖と考えていたのだろう。また、この祭祀は「天武系王朝から天智系王朝への皇統の交代に伴う政治儀礼の変化としてとらえるべきではなく、宗教思想の変化の象徴として把握⁽⁵⁷⁾」できるとの指摘もある。このように本祭祀が光仁天皇を祀り、冬至の日に行われたことはわかっているが、詳しい場所については定かになっていない。従来の研究によると候補地としては枚方市の片桱神社、杉ヶ本神社、交野天神社などが上げられている(図8)⁽⁵⁸⁾。



まずは片桱神社であるが、社伝によると垂仁天

皇のときに須佐之男を祀ったのが始まりであるとされる、式内社である。そして、大阪鬼門除、方除社として有名で「一宮の牛頭天王」、「片桱の御社」と呼ばれている⁽⁵⁹⁾。この神社付近に祭祀跡があるとされるのはこの土地の小字に「柏原」「元柏原」などつく地名が残っているからである。次に杉ヶ本神社であるが、片桱神社に近く、百済寺跡からも近い場所にある。この神社の創建は詳しくわからないが、八幡宮を祀っており、『大阪府全志』⁽⁶⁰⁾には郊天祭祀跡について杉ヶ本神社の南側に4坪ほどの広さがある墳墓のような小丘があり、そこに一本杉という老木があった、その場所が祭祀の一番有力ではないかと述べられている。ただ、この丘のサイズは中国の祭祀跡の20分の1程度であり、この周りには墳丘が多く、その一つではないかという指摘もある⁽⁶¹⁾。最後に、交野天神社(写真3)であるが、この神社は継体天皇が即位した楠葉宮跡だとも考えられている。創建は延暦6年に桓武天皇が交野ヶ原で光仁天皇を天神に配して祀ったのが始まりとされている⁽⁶²⁾。境内の奥には墳丘のところに貴船神社が祀られており雨乞い信仰が盛んであった。創建の由緒にもなっている通り桓武天皇が光仁天皇を天神に配して祀ったのであればこの近くに祭祀を行った場所があっても不思議でない⁽⁶³⁾。だが、祭祀場所とされているところで、はっきりとした発掘調査がなされていないため、どの場所かを特定することは難しいだろう。



図9 交野天神社の鳥居

ただ、桓武天皇が交野ヶ原で「天の神」を祀ったというのは事実である。中国でも都の南でこの祭祀を行っている。桓武天皇が交野ヶ原で祭祀を

行った時代の都は長岡京である。長年、長岡京については謎が多かった。しかし、長岡京の発掘調査が進み実態がわかるようになると、なぜあの場所に都を造営したのかが問題となってくる。その謎を解くヒントが交野ヶ原に隠れており、それがこの地域の特性を見いだす役割を担っているのではないかと考え、次の章からは長岡京の都市プランニングと交野ヶ原について論じていきたい。

第4章

長岡京の都市プランニングと交野ヶ原

第1項 民間伝承と「場所のセンス」

桓武天皇は延暦3年11月1日に山背国乙訓郡長岡村に都を移す詔をだす。それは、平城京の様々なしがらみからの脱出であったと言われている。高橋徹(注29)によると次のような理由が挙げられている。①長岡京のほうが「水陸の便」がいい。②旧勢力が強く新たな政治をするには都を移す必要があった。③仏教の勢力が政治に口だしするのを逃れるため。④渡来人の協力をえるためその本拠地に都を移した。⑤蝦夷征夷のため新しいところに移った。⑥井上皇后と他戸皇子の怨霊から逃れるため。⑦天命による遷都。⑧桓武天皇の生地。⑨行革説などである。

これらの理由を歴史地理学の環境知覚研究の視点からみれば、長岡京への遷都は桓武天皇の「場所のセンス」がかかわっている。第1章で述べたように「場所のセンス」とは「自身と、環境の様々な要素とをそれらの関係性のなかで読み解く能力」である⁽⁶⁴⁾。私たちは「場所のセンス」を普段の生活の中で意識しない。このセンスが発揮されるのはカオスの世界をコスモスのある世界へと創り上げるときだけである。例えば、引っ越しなど違う場所へ行ったとき、カオスが生じる。なぜなら、慣れ親しんだ土地との関係が途絶えるためである。そのため人はもう一度、慣れ親しんだ空間を作り上げるために家具を配置しなおすなど場所の再構築が必要になるからである。その際、発揮する能力が「場所のセンス」なのである。つまりは、カオスをコスモスのある世界へと創りかえる能力のことを指す。

それでは桓武天皇の場合ではどうなのだろうか。桓武天皇は平城京にあった都を急に長岡京へと移

動させた。都の移動とは時代の変革期であり、個人が行う引っ越しよりも大きな集合体で共有される「場所のセンス」が必要である。「場所のセンス」の背景には文化が重要になってくる。文化とは「人と場所との相互関係から生まれた、生活様式としての固有⁽⁶⁵⁾」のもので、地域や国が変われば、文化は変わってくる。人が環境を読み解くときに「場所のセンス」を発揮し、「民俗社会が環境と読み解くとき、彼らは伝承されてきた民俗知識を手引きするのだ⁽⁶⁶⁾」との指摘がある。この民俗知識こそが集団が共有する文化なのである。また、イーファー・トゥアンはカオスを物質的なものと精神的なものを使うことで人々がコスモス化していくと指摘している。この物質的なものが家具や家、街や都、へとつながり、都市プランニングに関わってくる。そして精神的なものとして天地創造神話や哲学体系など信仰や民間伝承⁽⁶⁷⁾などがあげられる。

であるなら、桓武天皇は新しい都、つまりコスモスの再構築に神話や伝承を、あるいは信仰を使ったことになる。その神話や伝承が交野ヶ原で語られていた天体に関する伝承ではなかったか。

第2項 都市プランニングの古代歴史地理学

さて、歴史地理学は人間の過去の地理的行動を理解するために様々な資料を使う。それは記述された人間行動は全体の行動の一部でしかなく、考古学資料にも限界があるが、その両方やそれ以外の方法を使って説明しようとするためである⁽⁶⁸⁾。

例えば、古代都市のような広範囲にわたる過去の地理的行動はすべてを発掘することは不可能である。また、文献資料も十分残っていない。その中で歴史地理学は現在、残っている河川や道路、小字などを利用して古代都市のプランニングを明らかにしようとする。ここでは、古代都城の先行研究として足利健亮の平安京の都市プランニング復原⁽⁶⁹⁾を示す。

図9をみるように足利は、まず鴨川の位置について単に洪水や遷都のために造り替えたのではなく、西堀川・東堀川・御室川と同等の意味で作られたのではないかと指摘している⁽⁷⁰⁾。また東西への都市プランニングが10里で行われているのであれば、南北でも同様に10里の意味を持った空間が



図9 平安京の都市プランニング
(注69 143頁より。)

あるのではないかとする⁽⁷¹⁾。さらに、大内裏の長さが470丈であるが、これは一条通りから船岡山までの距離と同じとし、船岡山は四神相応の玄武だと考え、平安京の中心軸だとも考えた⁽⁷²⁾。

このように歴史地理学における古代都市の復原は様々な情報を使って地図上で再現する。

第3項 長岡京プランニングの「場所のセンス」

先ほどは平安京の都市プランニングの事例を紹介したが、ここからは桓武天皇が平安京よりも先に都造営にあたった長岡京について見ていきたい。この長岡京は先にも述べたが、交野ヶ原で郊天祭祀が行われるなど交野ヶ原との関係が深い。例えば、千田稔は長岡京の中軸線を真っ直ぐ南に伸ばすと交野市倉治の交野山(写真4)の山頂付近にあたりと指摘している⁽⁷³⁾。

この交野山とは交野ヶ原の南、生駒山脈の標高344メートルの山である。麓の集落は倉治にあたり、山頂には倉治に住んでいた渡来人、交野忌寸



が繁栄した証として開元寺を建立した。この山の頂には観音岩と呼ばれる巨石があり、その場所から淀川下流の大阪市内、上流の京都市内を一望できる。ただ、地図上で確認すると正確に中軸線にあたるのではなく、中軸線より少し東に交野山の山頂があたる。筆者が地図上で計測したところ、長岡京の中心軸の延長線上には龍王山(写真4)があたる(図10:▲2参照)。この山は古来より嬰兒山と呼ばれ、第3章で紹介したように秦河勝の生誕に関わる地名である。山頂には龍王祠があり、祠は雨乞いに使われたとされている。そして山頂は巨石が多く存在し、それを御神体とした祠

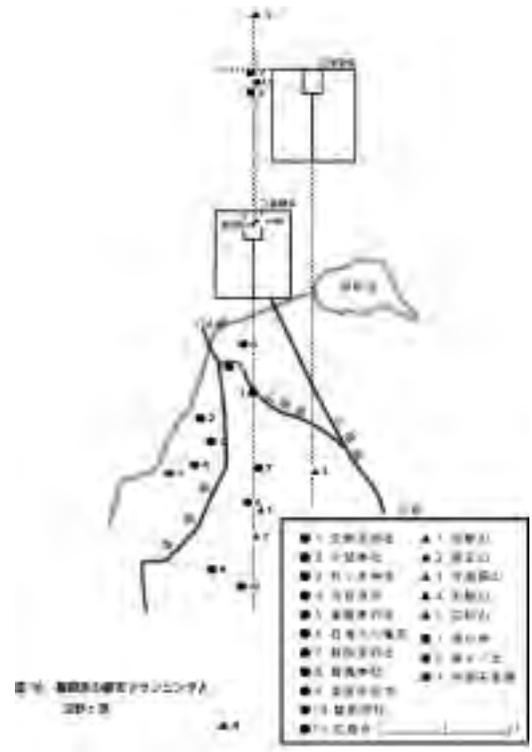




写真5 杉ヶ本神社

(写真5)は北を向いている。つまりは長岡京を望む位置にある。

図10が示している通り、長岡京の中軸線を南に延ばしたときの交野ヶ原のいくつかの伝承に関わる場所にあたる。まず、■1の洞が峠は山背と河内の国境にあたる。難波宮の中軸線の南延長線が郡や国の境となっていることが指摘⁽⁷⁴⁾されており、ここでも同様のプランニングが見受けられる。●7の藤阪天神は創建ははっきりとしていないが、桓武天皇の郊天祭祀を『続日本紀』では天神の祭ということから関連があるかもしれない。●8と▲1の関連は図5で見たとおり、機織りの渡来人の集落と関係している。

さらに、図10をみると中軸線の西側に郊天祭祀



三輪山真弘園



図12 杉ヶ本神社から見た冬至の太陽

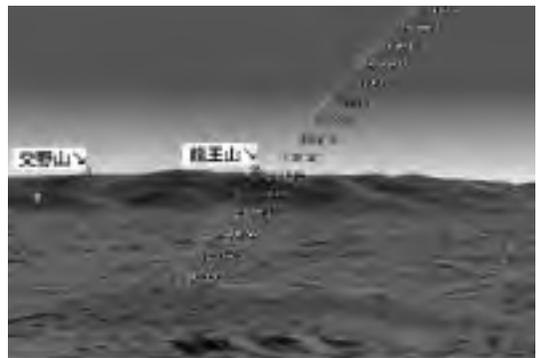


図13 伊加賀本町から冬至の太陽の動き

の場所とされる神社が分布している。そこで●8と▲1の関係についてだが、図5で示しているように交野山から神社のほうへ正東西から約28°⁽⁷⁵⁾北へ傾斜する。この方位は織物神社から見て交野山に冬至の太陽が昇る位置となる。この冬至の日の太陽が昇る方位は古代から神聖化されている⁽⁷⁶⁾。例えば、秦河勝の誕生伝承で出てきた奈良県の三輪山は山自体が信仰の対象⁽⁷⁷⁾で、農耕の神として信仰を集めている。図11を見てもわかるように弥生期の集落の太田から冬至の太陽の昇るところに三輪山がある。桓武天皇にとっても冬至は重要であった。なぜなら延暦3年11月1日に山背国乙訓郡長岡村に都を移す詔を出したこの日が「甲子朔旦冬至」であったからである。この「甲子」は変革の年を意味し、「甲子朔旦冬至」は4617年に一度しかやってこない大変珍しい日で桓武天皇はこの日に長岡遷都を宣言することに重要な意味を見いだした。そして、長岡京の中軸線の北西に郊天祭祀の候補地があるのは冬至の太陽が昇る方位を意識しているのだろう。例えば、図12の杉ヶ本神社の場合、この冬至の方位に藤阪天神社がある。

また、旧枚方市役所あたりから冬至の方位に交野山がある。旧枚方市役所は伝承④で述べていたように世界樹となる鈴見が松があった。そして、現在の枚方大橋渡りはかつて伊加賀の人々が住んでいたとされる屋敷があったが、そこから冬至の方位には龍王山がある(図13)。ここまで述べてきたように長岡京の中軸線の南には交野ヶ原があり、天体に関する伝承や寺社などが存在している。それらは郊天祭祀にとって重要な冬至の太陽が昇る方位に関連づけられるのである。

次に中軸線の北を見てみる(図10)。向井毬夫⁽⁷⁸⁾は長岡京の内裏の北延長線上に第3章で述べた秦氏ゆかりの広隆寺(●11)が当たり、さらに朝堂院⁽⁷⁹⁾の北に延長線を延ばすと標高268メートルの白砂山(▲5)にあたることを指摘している。日本の古代都市はいずれも北に山が存在しており、「天子南面して朝を聴く」とあるように、北の山は神聖視されている。標高268メートルの白砂山は御室川の源流にあたり、山麓は鳴滝がある。この鳴滝にはノアの箱船に似た洪水神話が伝えられている⁽⁸⁰⁾。日本にはこのような洪水神話はなく、ここにも渡来系の痕跡を見いだすことができるかもしれない。また白砂山の麓には、孝徳天皇の病氣平癒を願って白雉5(654)年に蘇我日向臣が建立したとされる般若寺や三宝寺がある。この三宝寺の満願妙見宮は北辰妙見尊が祀られており、今は寺の境内にあるが元は白砂山の山頂に祀られていた。北辰妙見尊は北極星を神格化した菩薩であるが、これが創られたのは後水尾天皇の勅命で開山した日護上人であるため時代が桓武朝とは違ってくる。しかし、後水尾天皇も長岡京のことを意識し、わざわざ山頂に北極星の神格化を置いたのではないだろうか。また、■3は桓武天皇の曾孫で郊天祭祀を行った文徳天皇陵である。記録上、郊天祭祀を行ったのは桓武天皇と文徳天皇だけであり、この位置に天皇陵があることは意味があるだろう⁽⁸¹⁾。このように長岡京の都市プランニングを念頭におくことによって交野ヶ原の渡来系の天体伝承と渡来人の里の太秦とが関連づけられることがわかった。

第5章 「場所のセンス」と天体伝承 —結びにかえて—

本論では、なぜ交野ヶ原で天体伝承が集中しているのかを明らかにするため、これまで歴史地理学の視点から述べてきた。そして、この天体伝承を調べることにより交野ヶ原の地域的特性を見いだそうとした。その結果、明らかになったのはこの地域に数多くの渡来人の痕跡があったということである。渡来人の痕跡としては機織、土木、農耕、酒造り⁽⁸²⁾、鷹狩り、道教思想などの技術や文化という民俗知識があげられる。この文化や技術は天界からもたらされた⁽⁸³⁾との伝承があり、それらが交野ヶ原に残る天体伝承の集中に関わるだろう。しかし、単にこれらの渡来系の人々との関連だけでは交野ヶ原の地域的特性をはっきりさせることができない。それは古代において渡来系の人々が住んでいた地域は交野以外にも多くある中で、なぜ現在において交野ヶ原だけにこの渡来系の人々の天体に関わる民俗知識が色濃く残っているかを知る必要がある。

さて、交野ヶ原の天体伝承が渡来人と関連があると述べたが、交野ヶ原が舞台とされている記紀神話にも天体に関わる神話が存在している。この神話は饒速日尊が他の神よりも先に地上に降り立ち、その場所が河内国の嗒々峰だとされる天孫降臨の話である。この話をみるように、渡来人がこの地に入るより前から日本の土着の神話が天界との関わりを示す話を残しているといえる。そして伝承として残っている話は、この日本の神話と渡来系の人々の神話とが結合されたものなのである。この結合に関わってくるのが日本の中央政権とも関わる渡来人であった。その内の一人として推古天皇や聖徳太子と関わりが深く、太秦に大きな一族の集落を持った秦河勝がいる。そして、彼の子孫は、『続日本紀』(延暦3年12月)に長岡京の宮城を築いた人物として「山背国葛野郡の人秦忌寸足長」と記述されており⁽⁸⁴⁾、秦氏と桓武天皇の関係は濃密だったといえる。それをさらに証明するものとして秦氏の本拠地である太秦の地名が交野ヶ原の近くの寝屋川市にも見受けられ、長岡京の中軸線の北は秦氏の氏寺、広隆寺にあたり、南は交野ヶ原の龍王山にあたる。この龍王山は秦氏の

始祖である河勝の生誕伝承と思わせる嬰兒山とも呼ばれている。そして、この龍王山は冬至の太陽が昇る方位に当たる点をふまえると、河勝が生誕伝承で流れ着いた三輪山と同様に世界山の役割を担っていた可能性がある。

このように交野ヶ原についてみると、この地域に残る天体伝承は桓武天皇の「場所のセンス」に関わり、この「場所のセンス」と同じ文化をもった人々によって、長岡京遷都へとつながっていった。それが、交野ヶ原を通したカオスをコスモスに転換させる「場所のセンス」の発揮に、強く関わっていたのである。

【注】

- (1) 藤岡謙二郎他『新訂歴史地理』大明堂、1990年。
- (2) 有蘭正一郎他編『歴史地理調査ハンドブック』古今書院、2001、4-6頁。real worldとは現代の現実世界であり、過去の現実世界である。資料上に出てきた地名や歴史的景観などの研究を通して過去の現実世界をできるかぎり復元し過去の地理を描き出す研究がなされている。imagined worldとは想像やイメージの世界であり絵画や小説など物語の世界に描かれている世界である。この研究では過去において復原された現実世界の上に物語世界を入れることが課題である。abstract worldとは抽象的な世界である。例えば都の中心の次は生産地であり、労働者の生活場でありその外側にあるのは低所得者の生活場になっており、その外側を裕福層の地域が広がっているというどここの国にでも起こりえる空間モデルことである。江戸期の城下町であれば、中心に城があり、その周りに武家屋敷が存在し、その外側を商人の空間がしめ、また外側に寺町が形成されるという空間モデル構成である。
- (3) 佐々木高弘「民話の歴史地理学」『月刊地球』通巻386号、2011年、691-695頁。
- (4) 大島襄二他編『文化地理学』古今書院、1989年、11-48頁。
- (5) Yi-Fu Tuan, *Perceptual and Cultural Geography, Annals of the Association of American Geographers*. 94-3 2003 p.878-881.
- (6) 福田アジオ他編『日本民俗大辞典下』吉川弘文館、2000年、632頁。
- (7) 佐々木高弘『怪異の風景学』古今書院、2009年、ii頁。
- (8) 佐々木高弘『民話の地理学』古今書院、2003年、117頁。
- (9) 前掲注7、115頁。
- (10) 前掲注8、125頁。
- (11) 「和銅4年(711)春正月2日初めて都亭の駅を設けた。山背国相楽郡には岡田駅、綴喜郡には山本駅、河内国交野郡には樟葉駅、摂津国島上郡には大原駅、嶋下郡には殖村駅、伊賀国阿閉郡には新家駅である。』『続日本紀(上)』講談社、1992年、119頁。
- (12) 各地名辞典が交野と茨田の分郡説を採用している。一方で、ミヤケの場所をめぐり不明瞭な点があるため分郡説に立たない説もある。西田敏秀「河内国交野郡素描 - 奈良時代～平安時代前期の遺跡群を中心として - 」『網干善教先生古稀記念考古学論集. 下巻』、網干善教先生古稀記念論文集刊行会編、網干善教先生古稀記念会、989-1012頁。上遠野浩一「茨田と交野の開発 - ミヤケに関連して - 」『歴史地理学』52(2)、2010年、1-17頁。
- (13) 竹内理三編『角川日本地名大辞典27・大阪』角川書店、1983年、301-304頁。
- (14) 国史大系編修会編「天孫本紀(先代旧事本記)」『国史大系7巻』吉川弘文館、1966年。
- (15) 秋里籬島『河内名所図会』臨川書店、1995年、486頁。
- (16) 交野市史編纂委員会『交野市史民俗編』交野市、1981年、315-316頁。
- (17) 床野英二『大阪の伝説 日本の伝説8』、角川書店、1976年、98-99頁。
- (18) これには細井浩志「中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書—天体信仰と暦—」『桃山学院大学総合研究所紀要』34(2) 2008、45-62頁。勝俣隆『星座で読み解く日本神話』大修館書店、2000年、はじめに。を参照した。
- (19) 篠田知和基「序言 天空という観念」『アジア遊学』、121(4-11)、勉誠出版、2009年、6頁。
- (20) 吉野裕子『隠された神々 古代信仰と陰陽

- 五行』講談社新書、1975年、214-215頁。
- (21) 野尻抱影『星の民俗学』講談社、1978年。
内田武志『日本星座方言資料』日本常民文化研究所、1949年。北尾浩一『天文民俗学序説—星・人・暮らし』学術出版会、2006年。相川利樹「天体認識にみられる民族的特徴--日本人の場合」『科学史研究』19(134) 日本科学史学会、1980年、116-122頁。
- (22) 勝俣隆『星座で読み解く日本神話』大修館書店、2000年。
- (23) 交野市史編纂委員会『交野市史交野町略史復刻編』交野市、1981年、98-105頁。
- (24) 谷川健一編『日本の神々第3巻 撰津・河内・和泉・淡路』白水社、1984年、195-206。「碓が峰」の場所が南河内の河南町平石にある磐船神社近くでないかなど物部氏に関連づけ様々な説を述べられている。
- (25) 前掲注23、113-117頁。
- (26) 前掲注23、104頁。
- (27) 福永伸哉「大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』42、2008年
- (28) 上遠浩一「茨田と交野の開発—ミヤケに関連して—」『歴史地理学』52-2(249)、2010年、1-17頁。
- (29) 高橋徹『道教と日本の宮都』人文書院、1991年、26-57頁。
- (30) 枚方市史編纂委員会編『枚方市史 第2巻』枚方市、1972年、172-177頁。
- (31) 大坪秀敏「百済王氏交野移住に関する一考察」『竜谷史壇』90、1990年、25-56頁。
- (32) 村山修一「古代日本の陰陽道」『陰陽道叢書1古代』名著出版、1991年、17-31頁では邪馬台国を含めた分裂国家から大和朝廷統一国家までを陰陽道の第一期とし、第二期は積極的に取り組まれた奈良時代末までとした。
- (33) 細井浩志「中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書—天体信仰と暦—」『桃山学院大学総合研究所紀要』34(2)、2008、45-62頁。
- (34) 「冬10月に、百済の僧観勒が来朝し、暦の本、天文地理の書、それに遁甲(占星術)・方術(うらないの術)の書をたてまつった。そこで書生3、4人を選び、観勒について学習させた。陽胡史の祖玉陳は暦法を習い、大友村主高聡は天文・遁甲を学び、山背臣日立は方術を学び、みな学業を達成した」『日本書紀下』中央公論社、1987年、128頁。
- (35) 田村圓澄「陰陽寮成立以前」によると「聖徳太子の制定になる冠位十二階の徳仁礼信義智の徳目の順序が、陰陽五行説に基づくこと、同じく太子肇作の献本の条数の十七が、陰・陽の極を現す八・九の合数に象られたこと、またその発布の年も甲子に当たる推古天皇十二年(604)であることなどにも、陰陽思想の影響を窺うことができる」と指摘している。『陰陽道叢書1古代』、名著出版、1991年、35-60頁。
- (36) 前掲注23、378-383頁。
- (37) 稲田浩二他編『日本昔話事典』弘文堂、1977年、605-606、621-622頁。「天人女房譚とは天女が羽衣を奪われたため、男の妻となる異類婚姻譚」で鶴女房はそれに付随している。鶴は神の化身であり、農耕とのつながりも強く、天女が天界に帰る時に瓜や豆の種を残したり、天女を追いかけて男が天界で難題を解決すると稲作や酒づくりなどを教わる。
- (38) 寺嶋宗一郎編『枚方市史』枚方市、1951年、518-520頁。
- (39) 谷岡武雄『聖徳太子の榜示石』学生社、1976年。の中で聖徳太子と榜示石の関係を述べているが、交野には奈良との県境に「榜示」という集落が存在している。
- (40) 前掲注38、518-520頁。
- (41) ロジャー・クック『生命の樹』(イメージの博物誌15)、平凡社、1982年。
- (42) ジャン・シュヴァリエ他『世界シンボル大事典』、大修館書店、1996年、920-922頁。
- (43) 前掲注38、524頁。
- (44) 同上、523頁。
- (45) 同上。
- (46) 前掲注17、100頁。
- (47) 前掲注34、129頁。
- (48) 前掲注29、道教的には全宇宙を八角形で捉える思想があり、その八角形の中心に神がいると信じられてきた。
- (49) 井上満雄『秦河勝』吉川弘文館、2011年、

- 2-3頁。
- (50) 同上。この伝承を創作した世阿弥は秦氏の子孫だと名乗っており、河勝が奈良に流れ着いたとするのは父の観阿弥が創立した結崎座に関係するとされている。ただ、河勝が壺に入って流れてきたとするのは河勝を神格化するために必要な伝承であったとされる。また、秦氏の出身地については『日本書紀』の応仁天皇14年に秦氏の祖先にでてくる弓月君は秦の始皇帝の子孫と伝えられている。秦氏の出身はハタというのは地名のから称したとして高句麗の「波旦」をあげる事が出来る。
- (51) 村尾次郎『桓武天皇』吉川弘文館、1969年。
- (52) 『続日本紀・下』講談社、1992年、428頁。
- (53) 前掲注29、194-203頁。
- (54) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典5巻』、吉川弘文館、1985年、360頁。
- (55) 前掲注52、366頁。
- (56) 前掲注52、389-390頁。「11月5日 天の神を交野に祀った。その祭文には次のように書いてあった。ここに延暦6年丁卯の年、11月の朔が庚戌に当たる甲戌の日に、跡嗣ぎの天子であるわたくしが、謹んで従二位・行大納言兼民部卿・造東大寺司長官の藤原朝臣継繩を遣わして、あえて明らかに昊天上帝に申し上げます。わたくしはうやうやしく昊天上帝の情け深い仰せをうけて皇位を継ぎ守って参りました。幸いにも天は祥瑞をあらわし、万物を覆い育ててその証を示され、世の中は安らかで落ち着き、すべての民も和らぎ楽しんで暮らしています。まさに今、太陽が最も南に達して(冬至)、長い影が初めて伸びています。ここにうやうやしく燔祀の儀式を行い、謹んで天の徳に報いる式典を行います。謹んで玉や絹、いけにえの肉、器に盛った穀物などの品々を揃え、以て天帝の祀りに備え、謹んで高潔な誠の心を捧げます。高紹天皇を昊天上帝に合祀して祀ります」。
- (57) 神英雄「桓武朝における郊天祭祀に関する歴史地理学的考察」『千葉乗隆博士古希記念日本の社会と仏教』日本仏教史の研究会、1990年、187-219頁。
- (58) 同上。郊祀の場所としては京都府田辺市大住辺りの説も取り上げられている。
- (59) 式内社研究会編『式内社調査報告 第4巻 京・畿内』皇學館大学出版部、1979年、233-238頁。
- (60) 井上正雄『大阪府全志4巻』清文堂出版、1922年、1356-1357頁。
- (61) 前掲注57。
- (62) 前掲注13、304頁。
- (63) 前掲注57。この論文の中で百済の祭祀場所選定の方法と中国の場所選定を合わせて交野天神社を選んだのではないかと指摘している。交野天神社は楠葉駅という交通の要所であった。そのため使節や物資の運搬が楽に行える。また、この祭祀で重要な役目を果たしている藤原継繩の別業とされているところがこの神社から近くに存在する。このことからこの交野天神社が郊祀を行った場所ではないかと推測されている。
- (64) 前掲8、92-95頁。
- (65) 同上。
- (66) 佐々木高弘「記憶する〈場所〉—吉野川流域の「首切れ馬」伝説をめぐる—」小松和彦編『記憶する民俗社会』人文書院、2000年、109-111頁。
- (67) イーファー・トゥアン『恐怖の博物誌』工作舎、1991年、16-17頁。また、前掲8において、民間伝承にはその地域の人々の「場所のセンス」が内在し、それが共有され蓄積されたものが民俗知識だとしている。そして前掲66の中で、話の中で語られる場所は人と場所との深い心理的つながりを示しているといえたとされている。
- (68) 佐々木高弘「「畿内の四至」と各都城ネットワークから見た古代の領域認知一点から線(面)への表示—」『待兼山論叢第20号』1986年、21-38頁。
- (69) 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂、1985年
- (70) 同上。西堀川と東堀川の距離(588丈：1758m)が、東堀川と鴨川との距離と同じである。それを西側で考えると西堀川から588丈は双ヶ丘の山頂を通る。この丘のから南に流れる御室川(天神川)が588丈のところまで流れてい

- たのではないかと推測している。そして、平安京の都市計画を入れ込むと先に船岡山と大内裏を中心軸とする東西10里(1800丈)の幅を取り、その両端に18丈の幅の鴨川と御室川を設定した。そして残りの1764丈を三等分するところに堀川を開いたのではないかと指摘している。
- (71) 同上。それには羅城門から南に10里の場所に朱雀という小字がある。四神相応の考え方でいくと南に池、巨椋池が重要だと考ええるが、その手前「京南正中線上10里」という一点に朱雀を祀っていたのではないかと指摘している。
- (72) 別の見解で藤岡謙二郎(『景観変遷の歴史地理学的研究』大明堂、1978年、70-75頁。)は平安京の中心軸は北の船岡山、南の朱雀大路の延長上にある京都府田辺市の甘南備山があげられるとしている。これにより平安京は船岡山と甘南備山を結んで中軸線を決定したのだと指摘している。
- (73) 千田稔『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店、1991年、38-40頁。
- (74) 前掲注72、171頁。
- (75) 山田彦彦『古代の方位信仰と地域計画』古今書院、1986年、113-184頁によると冬至の日出方位は正東を基準にして南へ28.76°の角度である。ここでは約28°とした。
- (76) 同上。冬至は暦上の基準となり、ある基準にもなる。冬至は一年で一番日照時間が短く、そこから日照時間は長くなっていくのでその方位は生産回復の方位だともされる。
- (77) 前掲注8(166頁)、前掲注42(1002-1006頁)によると、信仰される山は宇宙の中心のシンボルを宇宙軸(アクシス・ムンディー)にあたる。アクシス・ムンディーは世界樹(前掲注41、42)やこの山のように世界山、世界の柱などと関連づけられ、天と地が出会うところであり、神々が住み、天から降りてくるところである。三輪山は大物主命が降りてくる所であり、交野山や龍王山は雨乞いなど天からの恵を授かるために祈りを捧げた所である。
- (78) 向井穂夫『万葉方位線の発見—隠された古代都市の設計図』六興出版、1986年。
- (79) 本来、朝堂院は12の朝堂からなるとされているが、長岡京の場合は8しかない。これは道教的な思想で八は重要視されていたからである。前掲47参照。
- (80) 福田晃他『京都の伝説—洛中・洛外を歩く』淡交社、1994年、61頁。
- (81) 文徳天皇陵から南に帷子ノ辻がある。文徳天皇の祖母にあたる檀林皇后が嵯峨野で風葬され、その時身につけていた帷子が風に舞い落ちたところがこの辻である(小松和彦『京都魔界案内』光文社、2002年、198-200頁)。
- (82) 三善貞司『大阪伝承地誌集成』精文堂、2008年、527-528頁によると「狐酒」という伝承があり、この伝承において大門酒造の「菊養老」の造り方を狐から教わったとされている。
- (83) 前掲注37、621-622頁。
- (84) 前掲注49、107-108頁。

【参考文献】

- ※基本的に注記に掲載された文献は省いている。
- 天の川七夕星まつりの会編『交野ヶ原と七夕伝説』天の川七夕星まつりの会、2000年。
- イーファー・トゥアン『空間の経験』筑摩書房、1988年。『トポフィリア自然と環境』せりか書房、1992年。
- 内田武志『星の方言と民俗(民俗民芸双書80)』岩崎書店、2004年。
- 大越勝秋「河内国における条里制補遺1~5」『社会化研究9-13』1967-71年
- 勝俣隆「日本神話と「星座」」『歴史読本1月号』2009年、140-145頁。
- 北尾浩一「北極星の方言・伝承についての一考察1~3」『天界67(749)~69(751)』1987年。
- 篠田知和基編『天空の神話-風と鳥と星』楽郷書院、2009年。『天空の世界神話』八坂書房、2009年。
- 千田稔「古代都市の「かたち」」『地理25(9)』古今書院、1980年、64-73頁。
- 中尾智行「北河内の条里遺跡」『条里制・古代都市研究』2005年
- 中野美代子『仙界とポルノグラフィー』青土社、1989年。

- 西井長和『星田懷古誌 上巻』交野詩話会，1979年。『星田懷古誌 下巻』交野詩話会，1980年。
- 樋口忠彦『景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間』技報堂出版，1975年。『日本の景観 ふるさとの原型』春秋社，1981年。
- 福永光司他著『日本道教遺跡』朝日新聞社，1987年。
- 山田安彦「古代日本人の空間意識構造」『お茶の水地理23』66 - 67頁。
- 吉永明弘「人間主義地理学は環境論にいかにか寄与しうるか」『千葉大学公共研究4(1)』2007年。
- 若一光司『大阪地名由来を歩く』ベストセラーズ，2008年。
- 渡邊欣雄『風水 気の景観』人文書院，1994年。

【資料1】

西暦	年号	事項
前1.8万		神宮寺の山麓に旧石器文化が始まる
前1.2万		交野丘陵地の山麓部にナイフ形石器を持った旧石器文化が広まる(藤阪、津田、神宮寺、星田、四条塚)；
前7500	縄文	神宮寺山麓に早期縄文文化があらわれる
前2500	縄文	星田旭に中期縄文文化があらわれる
約100	弥生中期末	星田ぼうりょうに弥生中期文化があらわれ、稲作がはじまる
約280	弥生後期	伊香色雄命が天野川地方に入る：農耕文化を広める
約290		多弁宿禰が天野川沿岸を開拓し稲作がさかんになる
		この頃、農耕を中心とする集落が出来てくる 寺村巽山、倉治愛電所、森、群津、私市河原
		饒速日尊の渡来話が磐船の巨石と繋がり信仰される (『日本書紀』、『先代旧事紀』、『天孫本紀』)
		私部、私市・星田の間の田はよく実るとして甘田と呼ばれるようになり、そこを流れる川をあまの(甘野)川といい、その田の神をあまだの宮(天田宮)に祀った
約296～400	古墳前期	厩野物部氏が天野川流域に前方後円墳を築く
約400～450		交野忌寸の祖、漢人庄員は一族を率いて渡来し、交野山麓に住んで機織を広める 庄員は後に機物神社の祭神となる(『新撰姓氏録』) 機物一族の首長の前方後円墳(丸山古墳)が築かれる
577	古墳：敏達朝5年	これまで物部氏領だった天野川沿岸で群津・私部からの上流の田は敏達天皇の皇后の領となる この一帯を総称して私部という(『日本書紀』)
592	古墳：推古元年	敏達天皇の皇后は推古天皇となり皇后領だった私部が交野三宅と改まる(『日本書紀』)
約600	古墳後期	倉治機織りの集落が一部寺村の竜王山麓に集落を開く(後の畠山)
		交野山などに機物一族の首長の横穴式墳墓が造られる
646	大化1年	大化の改新令がでる(条里制ができる) 郡津に交野郡の郡衙ができる
672	白鳳1年	交野山付近の機織集落の長が壬申の乱で大海人皇子に従う その後の功績から交野忌寸の姓を与えられる
771	宝亀2年	2月に光仁天皇が交野に幸す(『続日本紀』)
783	延暦2年	10月に桓武天皇交野に行幸し、鷹狩りをする(『続日本紀』)
784	3年	長岡に都を遷都する。
785	4年	11月に桓武天皇交野柏原で天神を祀る(『続日本紀』)
787	6年	10月に桓武天皇交野に行幸し、鷹狩りをする。藤原経縄別業を行宮とする(『続日本紀』) 11月に桓武天皇交野柏原で天神を祀る(『続日本紀』)
791	10年	10月に桓武天皇交野に行幸し、4日間鷹狩りをする(『続日本紀』)
792	11年	10月に桓武天皇交野に行幸し、鷹狩りをする(『類聚国史』)
793	12年	都を平安京へと遷都する。 11月に桓武天皇交野に行幸し、鷹狩りをする(『類聚国史』)
794	13年	9月に桓武天皇交野に行幸し、鷹狩りをする(『類聚国史』)

795	14年	3月に桓武天皇交野に行幸し、鷹狩りをする（『類聚国史』） 10月に桓武天皇が交野に幸す（『日本紀略』）
797	16年	10月に桓武天皇が交野に幸す（『日本紀略』）
799	18年	2月に桓武天皇が交野に行幸（『日本後紀』） 10月に桓武天皇が交野に遊猟す（『日本後紀』）
800	19年	10月に桓武天皇が交野に幸す（『日本後紀』）
802	21年	10月に桓武天皇が交野に幸す（『日本後紀』）
845	承和12年	星田山荒山寺（小松寺）の仏堂建立（『小松寺縁起』） 平安時代の星田山は禿山だった（『小松寺縁起』）
856	斉衡3年	11月文徳天皇、河内交野が原に北天を祀る（『文徳実録』）
875	貞観17年	星田妙見山に影向伝説が起こる（小松神社所蔵「妙見山影向石略縁起」より推定）
900	昌泰3年	獅子窟寺創建、本尊薬師仏造立らせる（仏像の彫刻様式より推定）
907	延喜7年	この頃より饒速日尊をあたため住吉四神となる
923	延長8年	この頃中山観音寺創建（出土した瓦等より推定）